令和２年（2020）12月１日　長野市民新聞

（第三種郵便物認可）　長野市民新聞

吃音 実態や接し方は

古里小児童 講話聞く

古里小学校の3、4年生が11月25日、言葉が出にくかったり、詰まったりする「吃音（きつおん）」について学習した。吃音がある児童の希望もあって、県内小学校などを回って吃音への理解を広めている言語聴覚士を招き、授業の中で初めて企画。児童は、その実態や吃音の人との接し方を学んだ。

内藤さんの話に耳を傾ける児童

松本市内のクリニックに勤務する内藤麻子さん（51）が講話。吃音の人の割合は100人に1人で、統計上は長野市内に3800人いると説明し、吃音に悩む子供たちの声も映像で紹介した。

その上で、詰まったりすることは「吃音の人にとっては自然な話し方」と強調。せかすことで余計に言葉が出にくくなってしまうとして、「落ち着いて話を聞いてあげて」と呼び掛けた。

授業は、吃音がある4年生の折原幹太君が、通っている病院で内藤さんの出前授業のことを聞き、「吃音についてオープンに語り合いたい」と担任教諭に開催を掛け合った。

授業終了後、折原君は「授業ができてうれしかった。みんなが落ち着いて吃音の人の話を聞いてくれるようになっていけばいい」と喜んだ。クラスメートの上條庵さんは「映像を見て吃音のある人たちの気持ちを知ることができた。吃音の人がいたら、その人に合わせて話をしたい」と話していた。